

二代目市川団十郎日記詳解 — 享保十九年三月 —

はじめに

享保期江戸歌舞伎の中心的人物である二代目市川団十郎（元禄元（一六八八）年～宝暦八（一七五八）年）が残した日記諸本の成立や特徴、注釈書の概要、また本詳解の意図については拙稿「二代目市川団十郎日記詳解―享保十八年十二月～十九年一月―」（『埼玉大学紀要 教養学部』第五二巻（第二号）、以下「詳解1」と略す）に詳述した。ここでは写本・注釈書一覧及び凡例のみを記す。なお、日記文の掲載順序は写本よって異なるが、本稿では、『資料集版二世市川団十郎』に従った。また、同年二月中の記録については「二代目市川団十郎日記詳解―享保十九年二月―」（『埼玉大学紀要 教養学部』第五三巻（第一号）「詳解2」）に論じた。

二代目団十郎が日記に引用した書物の引用元が判明したものについては、その原文を日記原文の直後に掲載した。

凡例

- 一、記号▽○●△▼は原本を示す。
- 二、注釈書からの引用は、書名を「」で示し、引用文を「」で示

*ビュールク トーヴェ

埼玉大学大学院 人文社会科学研究所 准教授、日本近世文学、演劇（歌舞伎）

した。

- 三、「」のない注釈は筆者による。
- 四、日記本文中の数字は注の番号を示す。
- 五、引用文の約物は省略した。
- 六、出典の記載がない役者評判記は『歌舞伎評判記集成』（岩波書店、一九七二年～一九七七年刊）から引用した。
- 七、辞書類からの文章は適宜変更した。

写本一覧

- 「老のたのしみ」（▽）
- 「柿表紙」（○）
- 「柏箆日記」（●）
- 「病中日記」（△）
- 「市川団十郎日記発句集」（▼）

注釈書一覧

- 「老のたのしみ」
- 岩本活東子注「老のたのしみ抄」（『燕石十種』文久元（一八六一）年編、市島謙吉活字編明治三十九年（新版中央口論社、一九八〇年刊））

ビュールク トーヴェ*

〈岩〉

内藤耻叟・小宮山綏介注「老の楽」『温知叢書』博文館蔵、明治二十四年刊）〈内〉

博文館編輯局校訂「老の楽」『校訂俳優全集』博文館、明治三十四年刊）〈博〉

郡司正勝註「老のたのしみ抄」『近世芸道論』日本思想体系（六一）、岩波書店、一九七二年刊）〈郡〉

「柿表紙」

伊原青々園注「柿表紙」『栢筵遺筆集』大正六年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈伊柿〉

「栢筵日記」

伊原青々園注「栢筵日記」『栢筵遺筆集』大正六年写、早稲田大学演劇博物館蔵）〈伊栢〉

享保十九年三月

【日記】

▽三日 行徳へ鯨^①の寄りし時の三月上巳^②の序^③で潮干^④の発句す

馬刀^{まて}かたやくしら^④の跡を三日の海 才牛

【注】

（１）**行徳へ鯨** 「詳解２」「二月中旬頃」記録参照。

（２）**上巳** じょうみ。「じょうし」に同じ。三月三日の称。古く中国で、はじめ三月の初めの巳^みの日を上巳とよび、日本でも朝

廷・貴族の行事として三月三日に川辺に出て、はらえを行い、宴を張る（曲水の宴）ならわしであった。また、民間では古くから婦女子の祝い日として草餅・桃酒・白酒などを食したが、のちこの日にひな祭をするようになった。桃の節供（『日本国語大辞典』）。

（３）

潮干 潮が引くこと。ひき潮。潮がれ。また、潮が引いたあとの浜。干潟になった海岸。また、潮干遊（『日本国語大辞典』）。

（４）

馬刀かたや 〈郡〉「海士（あま）の両手肩（まてがた）。『待つ』にかかる枕詞。馬刀貝と連想がかかるか。高安本『馬刀かいや』。海人が潮水を汲み入れて運んだり、または、藻塩草を刈り集めたりなどするとき、両手両肩を使つて忙しく働くこと。「いとまなみ」「かきあつむ」などに、また、同音で「待て」などが続く（『日本国語大辞典』）。

【解説】

二代目団十郎は、二月中旬、行徳浦（現・千葉縣市川市）に流れてきた鯨二頭を三月三日の節句の句の題とした。『武江年表』によると、両国橋の広場で鯨を見世物にしたという。しかし、二代目団十郎の日記では、人々が鯨を見るために江戸から行徳浦に旅し、特に彼岸の日には賑わつていたとしている（「詳解２」参照）。鯨の移動が両手を使う力仕事なので「馬刀がた」としたか。一説に、馬刀貝^{まてが}が砂にもぐつてできる跡という（高安本Ⅱ〈岩〉によると「馬刀かいや」）ので、鯨が砂に残した跡にもかけたのか。

【日記】

○四日 鎌倉雪ノ下^①七左衛門来ル^②

桂苑椎儲上下儒学ノ書也^③

○其芸ヲ得タルヲ骨ヲ得タリト云 骨法骨氣ナドイフ 得ザルヲ骨高ト云 又無骨ト云 天性ノ器用ヲ天骨トイフ 天性其骨ヲ得タルノ謂也 東国ニテ無骨ナルモノヲ テンコチナイトイヘルハ 天骨ナキノ謂也(下略) 右桂苑椎儲ニアリ

(引用元「○或曰。学問にハ然る器用無器用一有之段。○答曰。正是^{イカニ}。器用無器用御座候。曲芸^{ワサケイ}などに。其芸を得たる骨を得たりといひ。骨法骨氣などいふ。得ざるを骨高と云。又無骨ともいふ。むまれつきの器用を。天骨といふ。天性其骨を得たるの謂なり^{イヒ}。東国にて。無骨なるものを。てんこちないといへるハ。天骨なきの謂なり。いかさま。天骨なきものも司有御座候なれども。それハ数十百人の中に一人にて候。例へバ。たとへバ文字読をもいたし候とても。(以下省略)」新潟大本『桂園椎儲』

【注】

(1) 鎌倉雪ノ下 雪下村。現・鎌倉市雪ノ下一丁四丁目、小町二

丁目、西御門一丁二丁目。鶴岡八幡宮から大倉の幕府跡を含む一帯。地名は源頼朝が鶴岡別当坊に北向きの山陰で氷室に夏まで雪や氷を保存させようとしたから由来する『吾妻鏡』(建久二(一二二〇)年二月一七日程)。近世は幕府直領・鶴岡八幡宮領。八幡宮の付近には旅館が多く、人馬の継立が行われた『相模国風土記稿』天保十二(一八四一)年。井原西鶴著『本朝二十不孝』(貞享三(一六八六)年刊)卷三「当

社の案内申程おかし」では「相州鎌倉山、雪の下と云所に、藤沢屋の木工右衛門、旅人の留宿をして」とあり、他の雪ノ下の職人としては「出見世」、「酒屋」、「ともし油売り」もある。

(2) 七左衛門 未詳。

(3) 桂苑椎儲上下儒学ノ書 田青岑著、原弘度編『桂苑椎儲』／『桂園椎儲』(享保十八(一七三四)年刊)。八世紀の新羅から渡った儒学書ですでに菅原道真が読んだとされている。天和三(一六八三)年に和訳され、享保十八年には『桂園椎儲』の書名で再刊された。

【解説】

ここでは鎌倉・雪ノ下から来訪した七左衛門が持参する儒学書『桂苑椎儲』(享保十八年)を引用。本書は、カタカナのふりがなつき。日記本「柿表紙」の表記は漢字とカタカナだが、引用元は漢字とひらがなで書かれている。二代目団十郎の日記は元々ひらがなが交じりだったものを、伊原青々園が筆写するときに、「栢筵日記」本文と区別するためにカタカナに直したか。

原文では、学問を芸能にたとえるが、二代目団十郎は芸能にかかわる部分のみを引用している。七左衛門については未詳だが、後述「二人照手姫」「小栗忠孝車」(狂言本か)、漢籍集『好青館漫筆』、和歌集『新歌さゝれ石』や『神祇歌』、茶書『利休茶湯書』、禅書『新注唱和江湖風月集』そして和歌・漢詩本『吾妻紀行』も持参したと思われる。あるいは鎌倉の本屋または版元か。

【日記】

○二人照手忠孝車第一ロガンノ釣第二ヘンドクグハリヤウノイキホヒ^①^②^③

【注】

(1)

二人照手忠孝車 未詳。『歌舞伎年表』には「小栗忠孝車」(天和二(一六八二)年八月、市村座)、また「二人照手姫」(貞享四(一六八七)年三月、市村座)という二つの演目がみられる。小栗判官と照手姫が鎌倉や江ノ島周辺を舞台とするさまざまな奈良絵本や説教本、古浄瑠璃本があるが、ここでは上記の歌舞伎の演目と関係する資料を指す。

(2)

ロガンノ釣 未詳。「露岩の釣」の意か。照手姫は小栗判官を毒殺した父によって小舟に乗せられ、海に流されるも、漁師に救われる。この場面に關わるか。

(3)

ヘンドクグハリヤウノイキホヒ 未詳。「辺土供具は竜の勢い」の意か。小栗判官の笛の音に魅せられた大蛇は、美女となつて小栗判官と契るが、小栗判官はその罰として常陸の国へ追放される。これに関わるか。

【解説】

評判記『金の揮』(享保十三(一七二八)年刊)は「小栗忠孝車」について「(享保二(一七一七)年)九月狂言重陽おぐりの節句 小栗くわん蔵と也 馬子の役きせるくわへて出は 池のせうじ袖岡庄太郎と兄弟分にて青物つくしのくぜつのせりふ 其昔市村竹之丞芝居にて小栗忠孝の車の狂言 親団十郎後藤左衛門 池のせうじに野田くらの丞

後に元ぶくして生島新五郎 若衆方の時兄弟分にてくぜつのかく 扱竹三郎でるにてむこ入の所へ半五郎鬼かげといふすもふ取にて出る時馬になそらへほめらるゝところよし 介十郎かわらけ売のせりふ此時有」と記し、初演時、初代市川団十郎が後藤左衛門を、元服前の生島新五郎が池の庄司を演じたことがわかる。二代目団十郎は享保二年に初代団十郎(没後十三年)と、初代の死後世話になっていた新五郎(江島生島事件で江戸から追放され三年目)の演技を踏まえ、オマージュとして再現したのか。二代目団十郎の森田座から中村座への移動が決まったときに、森田座における名残りの興行として「重陽小栗節句」が上演され、大当たりした(役者評判記『役者三幅対』(享保三年正月刊))。

また「二人照手姫」について『歌舞伎年表』(貞享四(一六八七)年三月)は「藤田小太夫、下り浅尾重次郎、出来嶋小紫亡魂の場大当り。横山三郎(村山平十郎)。此頃より続狂言といへども中入に「丹前所作」、惣踊等有之候」とする。役者評判記『役者二挺三味線』(元禄十五(一七〇二)年三月刊)「実悪方・上々吉 中山平九郎(市村座)評」は「すでに此人一廻り以前の卯ノ年、此座にて二人照手の狂言に、実一通りにて遊行上人になられし時は、さりとて埒のあかぬ役者と思ひしに」という。また『役者友吟味』(宝永四(一七〇六)年三月刊)は「立役・上々 中嶋間左衛門(市村座)評」は「廿ヶ年以前卯の年市村座小栗の狂言、横山三郎に村山平十郎殿、其下人兵藤勘介とて塩汲女にむりいわれし時、あどをうたれ名も知らぬ人成しか」と、『役者願紐解』(正徳六(一七一六)年正月)「立役・上々吉 中嶋間左衛門(森田座)評」は「卅年以前卯の年市村座おぐりの狂言に、横山三郎に村山親平十郎

殿の下人となられた時分は名もしらぬ人」とし、「二人照手姫」は再演されなかったが、初演後三十年経てなお評判記が参照することから、当時よく知られた興行だったと考えられる。

なお、「鎌倉雪ノ下七右衛門」が持参したとすれば、歌舞伎関連ではなく、鎌倉・江ノ島地域に関係するものであったとも考えられる。

【日記】

○五代史云 人之貪満者多禍其守約者多福

(五代史「曰人之貪満ナル者ハ多禍其守約ヲ者ハ多福」国会本『好青館漫筆』第一、1才)

○心経附註云 陳才卿一日侍食 晦庵先生ノ云 只易中節ニ 飲食ヲ 三字人不曾行得

(心経附註「曰陳才卿一日侍食 晦庵先生ノ曰只易中節ノニ飲食ヲ 三字人不曾行得」国会本『好青館漫筆』第一、1ウ)

二程全書程伊川ノ曰 今人以影ヲ祭或ハ一髭不シハ 相以 是別人大ニ不 便ナラ

(二程全書「程伊川ノ曰今人以影ヲ祭ル或ハ一髭不シハ 相似 則所祭是別人大ニ不便ナラ」国会本『好青館漫筆』第一、3才)

○孝経云 言満天下無口過 按韻瑞云 唐史ニ宋之問求為学士 則天曰 但恨有口過 爾註云口臭也此 与孝経義異也 寶漢卿曰 口過白芷七勿甘草一勿 為末塩水ニ調含ム再ヒ擦嗽ハ妙也

(孝経「曰言満ヲハ 天下ニ 無ニ口過 按スルニ韻瑞ニ云唐史ニ宋之問求為ニ求フニ学士ニ則天曰但恨ハ有ニ口過ニ爾注ニ口臭也此与ニ孝経ニ義異也寶漢卿曰口過ニ白芷七勿甘草一勿為ニ末塩水ニ調含ム再ヒ擦嗽ハ妙」国会本『好青館漫筆』第一、9才)

○鄭谷カ詩「一尺鱸魚新ニ釣得 陸龜蒙詩ニ但釣ニ寒江半尺鱸ヲ」楊誠齋詩「買來玉尺如何ソ短謂フレ鱸也 或云 雲州松江之鱸魚尺許 其風味美不レ可謂也 称スルニ松江ト 者蓋以此ヲ耶 又称スルニ世伊五(セイゴ)ト 者ハ松江之転音耶(カト) 按ニ中華亦謂ニ左慈釣ニ出ト三尺余ヲ 則大小共ニ一種也 李時珍云 長僅数寸 又正字通ニ云大者四五尺

(鄭谷カ詩「一尺ノ鱸魚新ニ釣得タリ陸龜蒙カ詩ニ但釣ニ寒江半尺ノ鱸ヲ」楊誠齋詩「買來玉尺如何ソ短謂フレ鱸也或ハ曰雲州松江之鱸魚尺許其風味美不レ可謂也称スルニ松江ト 者ハ蓋以此ヲ耶又称スルニ世伊五ト 一種也 李時珍曰長僅ニ数寸又正字通曰大者四五尺」国会本『好青館漫筆』第一、10才、ウ)

○螢雪叢ニ説云 夏秋ノ間雜菰輩皆是惡虫 蛇ノ氣凝結ヤ前後壞レ人甚斷テ不レ可食フ 或云 食ニ生椎茸ニ大ニ被レ傷

(螢雪叢説「曰夏秋ノ間雜菰輩皆是惡虫蛇ノ氣凝結ヤ前後壞レ人甚斷テ不レ可食 或ハ曰食生椎茸ニ大ニ被レ傷」國會本『好青館漫筆』第一、11ウ)

○千金方云 小兒不可弄槿花 惹病店槿為瘡子花

(千金方「曰小兒不レ可弄ス槿花ヲ惹レ病店槿ヲ為ニ瘡子花ト」國會本『好青館漫筆』第一、18ウ)

○唐子西文録云 蜀道館舍ノ壁間題一聯云 天不生仲尼万古加長夜不知何人詩也 水東日記ニモ引之有論

(唐子西カ文録「曰蜀道館舍ノ壁間ニ題ニ一聯ヲ 云天不シハ 生ニ仲尼ヲ 万古如シニ長夜ノ 一不レ知何人ノ詩也 水東日記ニモ引之有論」國會本『好青館漫筆』第二、1ウ)

○羅山文集云 歎衣服之士庶無別 譏茶器之高価傷財刺医科之昏庸不学 哀歌舞妓之誨淫乱風俗惡瞽者山伏各私設法令 昔年板倉氏京尹時禁歌舞妓

(羅山文集「曰歎シニ衣服ノ之士庶無フレ別 譏リ茶器ノ之高価傷ツクレ財ヲ刺リニ医科

之民庸不学ヲ^一哀^三歌舞妓ノ之誨^レ淫^ラ乱^ラ風俗ヲ^一惡ム^三警者山伏ノ各私ニ設^ラウヲ^二法令ヲ^一昔年板倉氏京尹ノ時禁ス^二歌舞妓ヲ^一国会本『好青館漫筆』第2、36才

○事玄要言物集⁽¹²⁾二云 飛禽皆属陽故昼飛而夜棲宿 然鳥独夜飛鳴者色黒属陰從其類也 鶴鶴夜飛鳴者水鳥会陰從其性也

(「事玄要言」物集ノ二曰飛禽皆属陽故昼飛而夜棲宿然モ鳥独夜飛鳴者色黒属陰從其類ニ也鶴鶴夜飛鳴者ハ水鳥含ム陰ヲ從其性ニ也」) 国会本『好青館漫筆』第一、18ウ)

○柴高縄聖徳太子堂所珍藏之楠化石物長四尺許処々半為石也 是在上州厩橋山中城主贈之矣 太子堂者撰天王寺執行信順法印所⁽¹³⁾所⁽¹⁴⁾建也

(「柴高縄」聖徳太子堂ヲ所珍藏スル之楠化石物長四尺許処処半為石ト也是在上州ノ厩橋山中ニ城主贈レリ之ヲ矣太子堂ハ者撰天王寺ノ執行信順法印ノ所ニ所⁽¹⁴⁾建一也」) 国会本『好青館漫筆』第三、十三才)

右好青館漫筆(上中下有)

【注】

(1)

五代史 中国の正史。百五十卷。宋の太宗の時、薛居正^{せいきやうせい}ら奉勅撰。開宝七年(九七四)成立。二十四史の一つ。実録や范質の「五代通録」に基づいて、後梁、後唐、後晉、後漢、後周の五代の歴史を記したものの。旧五代史。または中国の正史、七十四卷。宋の欧陽脩撰。二十四史の一つ。史書、小説などの古書を資料として後梁の太宗から後周の恭帝までの歴史を記したもの。記述は「春秋左伝」にならった簡潔な文体で、君臣道徳、華夷思想などの個性的な史観がうかがわれる。新五代史。五代史記。『日本国語大辞典』

(2)

心経附註 真徳秀(宋、一一七八―一二三五)撰 程敏政(明)注儒学書。慶安二(一六四八)年刊(西山真編、村上ノ平楽寺版)。本は『近世漢籍叢刊』に収録(国文学研究館日本古典席総合目録)。

(3)

二程全書程伊川 中国、北宋の程顥(明道、一〇三二―一〇八五)・程頤(伊川、一〇三三―一一〇七)兄弟の文集・語録・著述を合刻した書。六十八卷。朱子によって大成される宋学の先駆となったもの(『日本国語大辞典』)。

(4)

孝経 儒教の経書の一つ。孝道を論じたもの。孔子(孔丘)が門人曾子(曾参)に語り聞かせた形態で記してあるが、戦国時代末期、曾子学派の著したものと考えられる。その内容は、個人の道徳も天下国家の政治も孝を根本とし、孝こそ人と宇宙を一貫する原理であると説き、家族共同体の規範の優越する古代中国の社会政治制度に理論的根拠を与えた。日本への伝来は「十七条憲法」以前と推定され、「大宝令」には大学の必修科目と定められている。江戸時代中期、中国本土ですでに失われていた『古文孝経』(前漢孔安国伝)と後漢の鄭玄の注が校刊され、中国に逆輸入された『日本大百科全書』**鄭谷詩** 唐末の詩人。字は守愚。袁州宜春(江西省宜春市)の人。昭宗が華州に避難した際に随行し、寓居した雲台道舎で自作を『雲台編』にまとめた。やがて郷里に隠棲して没した。詩風は軽妙だが、線が細いと評される。晩唐の詩人たちと応酬した作も多く、「咸通の十哲」の一人に数えられる。伝は『唐才子伝』巻九にある(『集英社世界文学大辞典』)。

(5)

(6)

楊誠齋

楊万里（一一二七―一二〇六）宋代の詩人。字は延秀、号は誠齋。吉州吉水（江西省吉水県）の人。一一五四年

の進士。金国に対する抗戦派で、剛直な性格と時政への直言のため、中央ではあまり出世できず、地方を転々とする事が多かった。著書に『誠齋集』一二三巻がある『日本大百科全書』。

(7)

李時珍

明代の本草学者（一五一八―一五九三）。『本草綱目』の著者。一五五七年に楚王府の奉祠正（祭祀礼節などをつかさどる官）となつて良医所（侍医、お抱え医師）の職務を兼ね、一五五八年ごろ中央の太医院（医療をつかさどる国の役所。いわば国立病院）の院判（副長官、副院長）に推されたが、一年ほどで辞して故郷に帰つた。各地を訪ねて薬物採集や民間の処方・療法の調査などをして資料を集め、一五五二年から編撰に着手した。『本草綱目』を一五七八年に完成。一五九〇年に刊行が開始され、死後の一五九六年に完了、次子建元が刊本を神宗に献上した。同書は日本をはじめ、英・仏・独語などに訳され、東西の諸国に影響を及ぼした『日本大百科全書』。

(8)

螢雪叢説

未詳。医学書か。

(9)

千金方

医学書。正式の書名は『備急千金要方』。三十巻よりなる。中国、唐代の孫思邈によつて六五〇年ごろに著された。人命はたいせつなものであり、千金の貴さがある、一つの処方ですぐに救うというのは徳がこれを超えるものであるためである、ということから書名とされた。この書は唐代から宋

代にかけて広く用いられ、のちに『千金方』を扶翼する目的

で『千金翼方』三十巻が著された（『日本大百科全書』）。

(10)

唐予西文録

未詳だが歴史書『水東日記』（葉盛撰、明時代）にも引用されているとされていることから、これも歴史書か。

(11)

羅山文集

林羅山著、慶長十九（一六一四）年刊。目録一・三・文集卷一―七十五・附録卷一―五・詩集卷一―七十五。

(12)

事玄要言物集

『事言要玄集』の誤りか。辞書類、陳慥学編（明）、三十二巻、一六四八年序。

(13)

柴高繩聖德太子堂

原文注によると、聖德太子が四天王寺を建てた天王寺にあつたようだ。

(14)

好青館漫筆

木下菊所編、宝永五（一七〇八）年刊、漢籍の引用文集。

【解説】

二代目団十郎の日記に引用されている書物の中では『好青館漫筆』からの引用がもつとも長い。引用文の内容はバラバラで、中国や韓国、日本の歴史や軍法、漢詩文の方法、天文学、仏教説、神話など多岐にわたり、分類化されていない。現存しない書物も引用されている。二代目団十郎は、『羅山文集』や聖德太子に関する記述以外にも、医学や治療、食物、薬などに関する記録の引用が多く、医学や養生に興味を持っていたようだ。

【日記】

▽（鳥跡後集）新歌さゝれ石六巻茂睡（戸田恭光）^①^②

たちよりて其名やとはんす人はたそかれ時の夕顔の宿^③

(夕顔を

茂睡 戸田恭光

たちよりて其名やとはんすむ人にたそかれときの夕顔の宿

国文研本『和歌さゝれ石』ナ2―317―116、コマ1872 584)

○浮島ガ原ヲ過ルトテ世ニタグヒナキフジノ詠ハコ、ナメリトオモヘ

トミルコトカナハザル身ヲウラ見テ

目ニチカキ富士ノ高根ノ詠ヲモシラヌ我身ノ浮島ガ原

永律谷崎勾当^⑤

(「浮しまか原をするとして世にたくひなきふしの詠ハこゝなめりとおもへとみる事

はなはさる身をうら見て 永律谷崎勾当

目にちかき富士のたか根の詠をもしらぬ我身の浮島か原

国文研本『和歌さゝれ石』ナ2―317―116、コマ1873 010)

▽芻蕘^⑥の心をよみ侍りける おなし

夕日影残りし友をまつ原にうしひきよせて休む草かり

(○茂睡)

(「芻蕘のこゝろをよみ侍りける 茂睡 戸田恭光

夕日影残りし友をまつ原にうしひきよせて休む草かり

国文研本『和歌さゝれ石』ナ2―317―116、コマ1873 049)

▽人の追善にむの字を句のはしめにきて春虫といふ事をおなし

むかしたれすみけん宿の池ふりてみくさかくれに蛙鳴なり

(○茂睡)

(「人の追善にむの字を句のはしめにおきて春虫といふ事を 茂睡 戸田恭光

むかしたれすみけん宿の池ふりてみくさかくれに蛙鳴なりと

国文研本『和歌さゝれ石』ナ2―317―116、コマ1873 058)

【注】

(1)

〔鳥跡後集〕新歌さゝれ石 和歌集『鳥跡後集新歌さゝれ石』
了寿編、元禄十六(一七〇三)年刊。

(2)

茂睡(戸田恭光) 〈内〉「又云おなしは茂睡の事」、〈郡
「戸田恭光。歌人。名は恭光。江戸浅草に住す。宝永三年、
七十八歳で没」や「伊原本にて補入」。戸田茂睡(寛永六(一
六二九)年〜宝永三(一七〇六)年)。江戸前期の歌学者、歌
人。通称は茂右衛門、梨本などと号す。

(3)

夕顔の宿 『源氏物語』夕顔之巻を踏まえた歌。はじめ頭中
将の愛を受けて女兒(後の玉鬘)を生むが、頭中将の北の方
に脅迫されて逃げ出し、五条に仮住いの間に、垣根に咲く夕
顔の花の縁で、通りすがりの光源氏に見いだされ、関係をも
つ。このやさしくすなおな女性に、源氏はすっかり夢中とな
るが、八月十六日の夜、二人で出かけた廃院の闇の中で、夕
顔はもののけにとり殺される(『新版日本架空伝承人名辞典』。
浮島ガ原 静岡県東部、愛鷹山の南方にある旧浮島沼付近一
帯の低湿地。源頼朝、義経の初対面の地。また、平維盛の軍
が水鳥の羽音に驚いて逃走した所という。浮島の原。浮島。
歌枕(『日本国語大辞典』)。

(5)

永律谷崎勾当 谷崎永律、享保十八(一七三三)年没。江戸
時代中期の医師、国学者。江戸本郷にすむ鍼医。勾当。和歌
をよくし、患者として治療をした儒者の室鳩巢とは二十年に
わたり親交をもった。著作に「あさがほ記」がある(『日本人

名大事典』。

(6)

〔芻蕘〕〈内〉「活東子云芻蕘云云以下詞書なり」、〈郡〉「芻蕘 草刈と木こり」。すうじよう、すうきよう。草刈りときこり。転じて、身分の低い者をいった語（『日本国語大辞典』）。

【解説】

歌人戸田茂睡編『鳥の跡』（元禄十五年刊）の続集から引用されている。編集者了寿は戸田茂睡の門人だが、その他は知られていない。日記本「柿表紙」には『新歌さゝれ石』から歌四首が引用されているが、山東京伝が日記本「老の樂しみ」を制作する際、医師谷崎勾当の歌を省いたか。

【日記】

○神祇歌^①

元禄七ノ年加茂ノ祭祀フタ、ビトリヲコナワレケルヨシヲ聞テ
名ノミセシ加茂ノ祭ノモロカヅラ絶タルヲツグル御代ゾ久シキ
季吟法印再昌院^③

ヲナジトキ

神モケフウレシキ瀬ニヤアフヒツム昔ニカエル加茂ノ川浪
湖春^④

年毎ノケフノミアレバ絶セシアフヒノカヅラ長キ世カケテ

【注】

(1)

〔神祇歌〕 勅撰和歌集の部立ての一つ。神詠（託宣の歌）、祭祀関係の歌、神に手向けた歌（奉納和歌、法楽和歌）、その他神

への信仰を主題とした和歌からなる（『日本国大辞典』）。引用元は未詳。

(2)

〔元禄七ノ年加茂ノ祭祀〕 葵祭に同じ。五月十五日に行われる京都市北区上賀茂の賀茂別雷神社（上賀茂神社）、左京区下鴨の賀茂御祖神社（下鴨神社）両社の祭り。元来、賀茂祭と称し、平安時代に祭りといえは賀茂祭をさすほど有名であった。応仁の乱頃に絶えたが、元禄七年、五代目将軍の命令による再興させた（田中嗣人著「賀茂祭考」『華頂博物館研究』一一・二〇〇四年一二月）。

(3)

〔季吟法印再昌院〕 北村季吟（寛永元（一六二四）年～宝永二（一七〇五）年）。江戸前期の古典学者、俳人、歌人。通称、久助・再昌院。号は拾穂軒・湖月亭・慮庵。近江の人。松永貞徳に和学・俳諧、飛鳥井雅章に和歌を学び、のち幕府に仕える。和漢・神儒仏の学に通じ、中世以後の古典の注釈を集大成。門弟に芭蕉、素堂などがある。著は「徒然草文段抄」「源氏物語湖月抄」「枕草子春曙抄」「万葉集拾穂抄」、句集「新続大筑波集」など（『日本国語大辞典』）。

(4)

〔湖春〕 北村湖春、慶安二（一六四八）年～元禄十（一六九七）年。江戸時代前期の国学者、俳人。北村季吟の長男。二十歳のとき父の命で「続山井」を編集。以後季吟俳壇の実務をとり、著作の刊行を補佐する。元禄二年、父とともに幕府の歌学方となる。子の湖元が季吟の跡を継いだ。名は季順、季重。幼名は休太郎（『日本国語大辞典』）。

【解説】

徳川幕府に仕えた古典学者・歌人北村季吟の文集『菟芸泥赴』には「賀茂葵祭御再興初度宣命」も見え、季吟は賀茂祭の再興に深く関わった人物か。「神祇歌」は祭りの復興を祝う和歌か。

【日記】

○一 袋棚ノ事はモ七カザリ有コト也 此袋棚ハ紹鷗ノ作也 歌ニ我名ヲバ大黒庵ト云ナレハ袋棚ニソ秘事ヲ込ケル

(一)袋棚の事はも七かきり有事也此袋棚ハ紹鷗の作なり

歌に

我名をハ大黒庵といふなれハ

袋の事に秘事をこめける『利休茶湯書』第二巻、8ウ、東京都立中央図書館・加賀文庫)

○一 盆石ノ飾ノコト知ル人マレ也 東山殿榔歌ニ^④

盆石ノマエニハフタツハマヒサシウシロニ遠キ海ソエナラヌ

(一)盆石の飾の事知る人まれなり

東山殿御歌ニ

盆石のまえにはふたつ浜ひさし

うしろに遠き海そ見ならぬ『利休茶湯書』第四巻、8オ、東京都立中央図書館・加賀文庫)

○一 花入ニ生申サヌ花ハイツ花形トテ有コト也則歌ニ

花入ニ生ケザル花ハチンチャウケミヤマシキヒニ鶏頭ノ花
オミナヘシサクロカウホネ金仙花センレイ花ヲモキラヒコソ

スレ

「花入に生申さぬ花はいろ花かたとて有事なり則歌に

花入にいける花はぢんしやうけ

みやましきひにけいとうのはな

をみたへしさくろかうほね金仙花

せんれい花をもきらいこそすれ

古来より右の通生ぬ事なり『利休茶湯書』第五巻、3オ、東京都立中央図書館・加賀文庫)

○古田織部殿^⑦ 大阪ニテ片桐市正殿へ茶湯ノ時 椿進セラレケル狂歌ニ

未明ヨリ召ヨセラル、於茶ノ湯ノタマ／＼椿マヒラスル也

右ハ利休茶湯書六冊物末巻ニリヤウリノコトアリ古来ヨリ右ノ通生ヌコト也^⑩

【注】

(1)

袋棚 茶道に用いる茶棚の一種。志野棚に模して桐で作ったもの(『日本国語大辞典』)。

(2)

七カザリ 書院の飾りとする、硯屏・硯・水入れ・軸物・印籠・卦算・水瓶の七種(『日本国語大辞典』)。

(3)

紹鷗ノ作 室町末期の茶人武野紹鷗好みの、茶の湯に用いる袋棚。檜材の春慶塗で、下に二枚引のふすまのある地袋がつき、その上に四本柱で天板がのる。武野紹鷗(文亀二(一五〇二)年～弘治元(一五五五)年)は戦国時代の堺の豪商、茶の湯名人。名は新五郎、仲材といい、居士号を一閑と称す。

連歌師心敬の説く枯淡の美を茶の湯に取り入れ、四畳半茶室を基本とする草庵茶の湯の発展に指導的な役割を果たしたが、名物道具を多数所持したことからもうかがわれるように、わび茶への過渡期に位置づけられる。女孀の今井宗久をはじめ、津田宗及、田中宗易（千利休）らの師。和泉南宗寺の大林宗套に参禅し、これが茶人参禅の風を生む一方、茶禅一味が説かれるようになった『日本大百科全書』。

(4) **盆石** 黒い漆塗りの盆上に、数個の自然石を置き、大小九種類の砂を配して、大自然の景観をつくりだす日本独特の伝統芸術。江戸初期には、茶道にも取り入れられ、茶室の床飾りとして使われるようになった『日本大百科全書』。

(5) **東山殿** 足利義政（永享八（一四三六）年）延徳二（一四九〇）年。將軍職を子義尚に譲って東山に隠居したところからいう『日本国語大辞典』。

(6) **榔歌** 「御歌」の誤り。

(7) **古田織部殿** 安土桃山、江戸初期の武将、茶人（天文十三（一五四四）年）元和元（一六一五）年。法号宗屋、道号を金甫といった。初め織田信長に仕え、信長横死後は豊臣秀吉に従い、京都西岡を与えられる。秀吉の最晩年には御咄衆御伽衆に加えられた。慶長三（一五九八）年の秀吉没後は徳川家康に仕え、関ヶ原の合戦には徳川方に属して活躍した。千利休と親交し、利休が堺に塾居を命ぜられたとき、これを細川三斎と淀の舟本で見送った。のちに利休七哲の一人に数えられるが、利休没後、秀吉の命で利休の茶を改めて武門の茶法を

制定したとも伝え、慶長初年には茶の湯名人との評を得ている。將軍秀忠にも茶の湯指南にあたっている。大坂夏の陣に大坂方に通じた廉で罪に問われ、伏見木幡の屋敷で自刃した『日本大百科全書』。

(8) **片桐市正殿** 片桐且元（弘治二（一五五六）年）元和元（一六一五）年。安土桃山時代の武将、東市正に叙位。賤ヶ岳の戦いでは七本槍の一人。関ヶ原以後は徳川家康のために尽くした『日本大百科全書』。

(9) **利休茶湯書** 『利休茶湯書』は延宝八（一六八〇）年刊。巻一〜四「利休茶湯書」、巻五「利休聞書秘伝」、巻六「百数寄道具客并会席」。

(10) **末卷ニリヤウリノコトアリ** 未詳。『利休茶湯書』第六卷「百数寄道具客」の九月二十二日昼の条には「客 古田織部」が見えるが、椿についての記事、また狂歌がない。

【解説】

ここで引用されている茶書『利休茶湯書』は、初心者向け茶の湯の説明書であり、第一〜五巻は茶の湯に用いる道具について説明されている。ところどころに和歌も記されており、それも引用されている。第六巻は会席の記録だが、和歌や狂歌が記されていないので、二代目団十郎は古田織部が参加した会の記録を読みながら、他の狂歌を思い出したのか。

懷石料理としての椿について、料理本『精進献立集』（文政二（一八一九）年刊）では「椿の仕やう」について「ぼたん同やうなり、くり、

かしら、いも、白たまつばきはくりがよし むきやうぼたんのはなびらと同じやうに、むき手のひらにのせ、ほうてうのむねにてたつにそりをつけ水へおろし、此花びら五枚又少しいさを五まい、にほひぼたんのとをり少しいさくするぼたんはにんじん五つまく、つばきは二つまきにてよし、また「花ひらのつけやうぼたんのとをりつほみ小のくわみ半ぶん、かはとりあと半ぶんのところづのごとくきりかたいて、枝はつばきなくはかなめにてもによりたるものにてする」とし、椿を牡丹のように栗と人參と合わせて食べたか。

【日記】

○新注唱和江湖風月集^①ト云禅林ノ詩集アリ オモシロキモノ也

蛙ヲ聴ノ詩有^②

【注】

(1)

新注唱和江湖風月集

『江湖風月集』、心注唱和(新註唱和)、

南宋期の禅誌と賦、いくつかの和訳や注釈があるが、享保三(一七一八)年刊の月坡道印(建永十四(一六三七)年)享保元(一七一六)編『江湖風月集』(駒澤大学蔵)また享保十七年刊の陽春主諾編『江湖風月集略註取捨』(国会図書館蔵)は時代的に近く、二代目団十郎はこれらを見たか。

(2)

蛙ヲ聴ノ詩

「聴蛙 頭イ戴テ青苔ヲ咄咄鳴ク千山虚寂ニ」月初^テ

明ナリ一機頓ニ発空スニ諸有ヲ一太雅ノ松風ニモ無ニ此ノ声ヘ」『江湖風月集略註取捨』国会図書館蔵本、上のオ・ウ24(コマ27、28)のことであらう。

【解説】

二代目団十郎は蛙についての漢詩を「オモシロキモノ」と高く評価する。『江湖風月集略註取捨』注によると、「聴蛙」の詩は禅書『無門関』にある「庭前栢樹子」という逸話に関わり、自然そのものの体験によつて悟りを導く方法を語っているとされている。享保十九年五月一日(○)には『無門関』の「庭前栢樹子」からの引用もあることから、この頃二代目団十郎が禅仏教に興味を持っていたであろうことを示す。二代目団十郎は享保二十年、海老蔵に改名すると同時に俳号を「栢庭」に改めた。「栢」の字を使用するのは「庭前栢樹子」への関心を表しているか。

【日記】

○吾妻紀行(上中下有)^① 谷口氏重^②以東遊ノ紀行也 宇津宮由的跋^③アリ

【注】

(1)

吾妻紀行(上中下有)

紀行文『吾妻紀行』谷口重以著、元

禄四(一六九一)年刊。

(2)

谷口氏重^①

江戸時代前期の俳人。京都の人。松永貞徳、服

部定清、北村季吟に師事して貞門の俳諧を学び、のち談林派に転じ、田中常矩に師事した。寛永年間に生まれ、宝永元年(一七〇四)以降に死去。本名は重以。通称は宗兵衛、十郎兵衛。別号に同和、楽山子。編著に「吾妻紀行」「百人一句」「新百人一句」など『日本人名大辞典』。

(3)

宇津宮由的

宇都宮遯庵(寛永十(一六三三)年)宝永四(一

七〇七年。江戸前期の儒学者。名は由的、字は三近。遯庵、頑拙と号す。周防（山口県）の人。京都の松永尺五に学ぶ。京都で開塾し、経書の標注書を多く著し、儒学の振興に寄与した。その著『日本古今人物史』の一部が幕府の忌諱に触れて寛文末岩国に禁固されたが、延宝三（一六七五）年に許されて帰京した。宝永六（一六七八）年、岩国藩の儒者となり、元禄四（一六九一）には岩国に帰って藩学の振興に尽くした（『日本大百科全書』）。

【解説】

俳人谷口重以が京都から江戸や宇都宮への旅を題材にした和歌・俳諧・漢詩の集に儒学者宇都宮遯庵の跋文があると記す。その跋文は「右行紀三卷ハ谷口氏重以東遊メ足跡ノ所至視聴ノ所及ヲ無シレ不_二随_テ筆_メ而備_サニ録_セ之ヲ所_レ載_{スル}之詩歌不_レ論_二古今遠近ヲ_一欲_メ使_レ見_ル者易_{カラ}一_レ知_二其地ノ之形勝ヲ_一也可_レ謂_有ト助_二于興志ニ_一予与_二谷口氏_一為_レ友也久シ矣能_ク諳_スニ其為_ヲ一_レ人ト真_ニ好事之ノ韻士風流ノ之騷客也逮_ヲヨシテノ_三所_レ著_ス之書_{コトヲ}ニ于梓_ニ一_レ勞_メニ書信ヲ一_レ以_テ請_フレ加_シンコトヲ_二一_レ言_ヲ於卷末ニ不_レ獲_レ辞_{ズル}コトヲ_一於_テ是ニ手跋_ス」とあり、作者の谷口重以と宇都宮遯庵の親しい関係を示している。

【日記】

○齒ノ痛フクミ菓 英子口伝 仙下ニモ英子伝授セシ由^①
○山椒十匁 柿核十 玉子売一ツ センジャウ常ノ如ク^②

【注】

(1)

英子（伊柿）「津打力」。歌舞伎の狂言作者、二代目津打治（次）兵衛（天和三（一六八三）年―宝暦十（一七六〇）年）。俳名英子。別号太鼓堂・鈍通。父とともに江戸へ下り、元禄末年に治兵衛を継いだという。宝永七（一七一〇）年江戸・中村座「一心二河白道」で大当たりをとり、宝暦年中まで作者として活躍した。時代と世話を綯交ぜにした趣向本位の作劇法で、江戸の狂言作法に大きな影響を与えた。代表作には、二代目団十郎が二回目の助六を演じた「式例和曾我」（正徳六「一七一六」年、中村座）などがある（『新版歌舞伎事典』）。

(2)

仙下（伊柿）「仙家、山中平太郎の事か」。立役者二代目山中平九郎の謝りか。初世は俳名仙家。若い頃は実事を専らとし、さほどの評判はなかったが、元禄初年に時平大臣、ひがみの王子などの公家悪に名をあげ、元禄十三年には江戸実悪の開山と賞されて、以来実悪役者として翌年八十二歳で没する享保八年まで実悪巻頭の地位にあった。江戸歌舞伎の荒事の悪の表現は平九郎によって様式として成立をみたといえる。二代目は初世の門弟で、享保十五（一七三〇）年平九郎を襲名（『新版歌舞伎辞典』）。

【解説】

二代目団十郎は狂言作者二代目津打次兵衛から聞いた菓の調理法を記し、また立役者二代目山中平太郎にも伝えたとしている。治兵衛は享保十九年に、二代目団十郎が座頭だった市村座で作者を務めてお

り、興行や台本について二代目団十郎と相談することも多かった。当時、平九郎も市村座に務めていた（「立役、上々」『役者初子説』享保二十年正月刊）。

葉は山椒や柿の種、また卵をベースにしていたようで、ここにも二代目団十郎の医学や養生への関心が現れている。

【日記】

▽狩野如川^① 曲書によりかき紙角と書^② いつれも奉書にて^③ 但し只の紙^④ 紙にても^⑤ 田宮安実殿物語^⑥ かんちくやうせんは名人のよし^⑦

【注】

(1) 狩野如川〈郡〉「絵師。木挽町狩野家三代、周信。享保十三年、六十九歳で没」。万治三（一六六〇）年生まれ、狩野常信の長男。延宝六年江戸城障壁画制作に参加。正徳三（一七一三）年、木挽町狩野家をつぐ。享保四（一七一九）年法眼となり、朝鮮への贈呈屏風を手がけた（『日本人名大辞典』）。

(2) によりかき紙角〈伊柿〉「試」、〈岩〉「により試角」〈内〉「しかく」活東子云により試角、一本に小よりかき紙角とあり不審、〈郡〉「小よりがき紙角」小よりは紙綾。「高安本」により試角」

(3) 奉書 古文書の様式の一つ。広く主人の意をうけて従者がみずからの名を署して出す文書をいう。又奉書紙の略（『日本国語大辞典』）。

(4) 只 〈岩〉「唯」

(5) 田宮安実 未詳。

(6) かんちく 〈伊柿〉「山楽力」、〈岩〉「三楽力」、〈内〉「又云かんちくは三楽か」、〈博〉「かんちくやうせん（原本の儘）」

(7) やうせん 〈伊柿〉「養川力」、〈岩〉「養川力」

【解説】

「老の楽しみ」諸本（岩、内、博、郡）では、この日記文のあとに「稲葉家の臣取次役、小波又右衛門と云人、云々」と続くが、「柿表紙」（伊柿）では、「稲葉家」の文章は享保十九年五月一日に収録されている。

伊原青々園は「柿表紙」を写しながら、「老の楽しみ」と重複する記述に漢数字を記した。（伊柿）ではこの日記文には「九」が付され、朱書で歯葉の後に書き加えられた。「老の楽しみ」では、この日記文と「稲葉家」の文章が五月一日に収められ「十」が付された。狩野如川と稲葉家の逸話はどちらも珍しい古美術品についてのものだったため、山東京伝は両者をまとめたか。

【日記】

○同二月七日八日庭ノ桜咲揃真盛也^① 隣薪水桜モ同前桃ハ三四日前咲揃^②

菜ノ花ヤ妹ガ垣根ノ裏通リ 才牛

盃ヘウケル真似スル胡蝶カナ 同

題晴天暖気

伊勢日ハ袖ウチハラフ小蝶哉 同

【注】

(1) 同二月「伊柿」「三カ」

(2) 薪水「伊柿」「坂東彦三郎」。立役者、初代、元禄六（一六九

三）年、宝暦元（一七五二）年。大坂生まれ、二代目団十郎、初世沢村宗十郎、初世大谷広次とともに四天王として名をあげた。小柄ながら容姿・口跡にすぐれ、実事・武道事を得意とした（『新版歌舞伎辞典』）。

【解説】

「柿表紙」では二月に収録されているが、伊原青々園は三月の誤りと推測する。庭の桜が満開になり、それを題として句を詠んでいることから、三月であろう。しかし、隣の坂東彦三郎邸の庭には梅の花も揃って咲いたということから、やはり疑問が残る。二代目団十郎は長谷川町・人形町通りに住んだとされる（「詳解1」享保十八年十二月記録参照）。彦三郎は大坂出身だが、江戸に下り、市村座の立役者として務めた（評判記『役者遊見始』（享保十三年正月刊）。評判記『役者三津物』（享保十九年正月）には「立役、上々吉、市村座」とあり、当時、二代目団十郎と同座に務めていた。

【日記】

○十一日二名題ヲ出ス スエヒロ隅田川^① 翌十二日 マネキ五人男^②ノカンバン出ス 評判大キニヨシ所ニカンバン出スト 三右衛門^③又病氣散々ニテ十五日ノ初日十六日延引狂言立替へ 三右衛門替半五郎^④ニ直シ十六日ヨリ初日出ス 三右衛門ハ前代未聞芸名賀ナキ役者也 仲間

見物トモニ散々ノ評判江戸中ノ笑草祖父親迄ノ名ヲ下シ扱々笑止成事トモ也 役者タルヘキ者心得ベキ事也

【注】

(1) スエヒロ隅田川 「繁扇隅田川」（「詳解1」享保十九年一月六日参照）。

(2) マネキ五人男 五人男物。人形浄瑠璃・歌舞伎狂言の一系統。雁金五人男、雲霧五人男、白浪五人男などという。雁金文七

を頭とした庵の平兵衛、布袋市右衛門、極印千右衛門、神鳴庄九郎という実在した五人の無頼漢（元禄十五年八月刑死）を、獄門の直後から人形浄瑠璃や歌舞伎で「雁金文七秋の霜」として演じ、以後享保二（一七一七）年江戸・中村座では「街道一棟上曾我」など、五人男が勢揃いして述べるつらねが評判となった（『新版歌舞伎辞典』。紋番付『芝居紋番付』国会図書館蔵）やセリフ正本「江戸桜五人男せりふ」（ケンブリッジ大学蔵）によると雁金文七は市村竹之丞が、極印千右衛門は坂田半五郎、庵の平兵衛は坂東彦三郎、布袋市右衛門は大谷広次、そして神鳴庄九郎は市川団十郎が演じていた。

(3) 三右衛門 三代目嵐三右衛門（「詳解1」、享保十九年一月六日参照）。

(4) 半五郎「伊柿」「坂田」。初代、（天和三（一六八三）年、享保二十（一七三五）年。二代坂田藤十郎の門下。享保四年、朝比奈三郎（義秀）役の荒事で名をあげ、九年実恵に転じ上手と評された。享保二十年四月二十三日、市村座の舞台で死去。

俳名は杉暁。屋号は正月屋（『日本人名大辞典』）。

(5) **名賀**（伊柿）「冥加」

【解説】

三代目嵐三右衛門は享保十八年十一月、江戸に下ったが、病気のため顔見世に出演できなかった。享保十九年正月六日、初めて市村座の舞台で二代目団十郎と並び口上を述べた。当初は好評だったが、二、三日すると声が枯れた（「詳解1」参照）。二月一八日から新しい趣向を挑戦したが、また声が弱いと批判された（「詳解2」参照）。ここで、さらに別の演目が上演される直前に病氣となり、初代坂田半五郎が代役を務めることになった。

半五郎のセリフには「嵐三右衛門がわつらいゆへ・おもハもよらぬやくかハリ・ちかごろめいわく千右衛門」（セリフ正本「江戸桜五人男せりふ」ケンブリッジ大学蔵）とあり、二代目団十郎がいうように三右衛門は「仲間見物トモニ散々ノ評判」であったようだ。

また、紋番付にもセリフ正本にも代役が載っていることから、どちらも興行が始まってから作られたことがわかる。

【日記】

○十七日 川島ヤニテ和交万句^① 十町路考千魚予父子発句遣ス^②

獅子ノ子ノ中ニテ咲ヤ岩ツ、シ^③ 才牛^④

親和樹隠シ点獅子ナレバナリ^⑤

【注】

(1) **川島ヤ**（伊柿）「川嶋屋」。版元か。あるいは市川宗三郎の屋号「河内屋」の誤りか。

(2) **和交** 未詳だが、桐淵貞山の還暦を祝う俳諧書『江戸名所』（享保十八年刊、題吉原）に「里へ突是も添木か幾久の華」という句あり、江戸座の俳人か。

(3) **十町**（伊柿）「大谷広治」。役者評判記『役者初子読』（享保二十年正月刊）の「立役之部」には「上上吉 十町 大谷広治市村座」とある。初代（元禄九（一六九六）年）延享四（一七四七）年。通称大十町。初世大谷広右衛門の子。正徳元（一七一）年、二代目市川団十郎から荒事の芸を譲られ、実事の芸風を開拓。俳号十町。屋号丸屋（『歌舞伎事典』）。

(4) **路考**（伊柿）「瀬川菊之丞」。役者評判記『役者初子読』（享保二十年正月刊）の「若女形之部」には「上上吉 路考 瀬川菊之丞 市村座」とある。初代（元禄六（一六九三）年）寛延二（一七四九）年。通称浜村屋路考。上方の色子出身で初め瀬川吉次といったが、宝永六（一七〇九）年瀬川菊之丞と名のつて初舞台。享保後期を代表する女方で、享保十五（一七三〇）年に江戸に下る（『日本大百科全書』）。

(5) **千魚**（伊柿）「仙力（菊次郎）」。役者評判記『役者初子読』（享保二十年正月刊）の「若女形之部」には「上上吉 仙

魚 瀬川菊次郎 市村座」とある。正徳五（一七一五）年、宝暦六（一七五六）年。初代瀬川菊之丞の弟。京都で初舞台、若女方として活躍。享保十六年江戸にいき市村座に出演。傾

城、女家老を得意とした。俳名は仙魚。屋号は浜村屋。

(6)

【獅子】

仏教では、文殊菩薩の乗り物であり、悪魔を圧する霊力があると信じられたために、門や扉の守護物とする習俗が生じ、日本でも、神社の社前や宮中の鎮子に、狛犬と対をなして獅子の像を置き魔除けとした。新年や祭礼に「獅子頭」をかぶって舞う「獅子舞」も、悪霊退散の呪術であり、日本へは中国から伝来した『日本大百科全書』。能と歌舞伎の石橋物では獅子が清涼山にある浄土に架かる石橋で舞う。

(7)

【岩ツ、シ】

岩躑躅。石や岩のほとりに生えるツツジ。古今集以後の和歌では「いはねば」「いはねど」「いはでや」「いはばや」など「言ふ」を導く序詞として恋を歌うときにも用いられるようになった『日本国語大辞典』。

(8)

【和樹】

和尉の誤りか。初代市川宗三郎。役者評判記『役者初子読』(享保二十年正月刊)の「実悪之部」には「上上吉 和定 市川宗三良 市村座」とある。初代(貞享四(一六八七)～宝暦二(一七五二)年)。江戸の初代市川団十郎に入門。享保十六年からは宗三郎の名で出演、江戸随一の実悪役者と称された。俳名は和尉。屋号は河内屋『日本人名大辞典』。あるいは、その息子か。初代沢村宗十郎(俳号訥子)が江戸から大坂に上ったときに編んだ句集『置土産』(寛保三年刊)に「来る年は又江戸に咲け帰花」という句あり、俳諧を好む歌舞伎役者の一人だった。

【解説】

二代目団十郎や息子三代目団十郎、大谷広治、瀬川菊之丞、瀬川菊次郎ら歌舞伎界の幹部役者が川嶋屋に俳諧集『和交万句』に発句を送る。

二代目団十郎の句は清涼山の石橋で踊る獅子と岩の間に生える躑躅の花にかける。「和交」の親「和樹」は裏で俳諧集を添削するから、「和交」を「獅子の子」に見立てている。このとき、瀬川菊之丞が中村座の所作場面「風流相生獅子」で大当たりしたことにもかけるか。

【日記】

○十九日ヨリ二ノ序不残出ス 勘三郎方モ新狂言出ス 十八日迄ハ五人男出キリ也

【注】

(1)

【二ノ序】「繁扇隅田川」の二番目「第二 身請(みうけ)の小判(こばん)ハ土生金嫁入(どせうきんのよめいり)」の序が上演される『芝居紋番付』(国会図書館蔵)。

(2)

【勘三郎方】(伊柿)「中村座(沢村宗十郎座頭也)」

【解説】

二代目団十郎が出演する市村座において三月十六日よりはじまった「繁扇隅田川」の二番目の序幕「身請の小判ハ土生金嫁入」(『芝居紋番付』(国会図書館蔵))は、この日になってようやく最後まで上演された。

嵐三右衛門が病気で出演できなかったため当たらず、二代目団十郎はこの場面の上演日数を短くし、次の趣向を準備した。当時、一つの作品が一日かけて通演されることは少なく、一場面が人気を集めると、二、三週間繰り返し演じられ、人気下がると、次の場面に変えられた。

「繁扇隅田川」二番目について「第二ばん目、ほて市右衛門大谷広治、かみなり庄九郎市川団十郎、かりがね文七市村竹之丞、あんの平右衛門坂東彦三郎、ごくゐ千右衛門坂田半五郎、江戸桜五人男掛け合い文七ふし」、「第二ばん目、市川団十郎、坂田半五郎、大谷広治、坂東彦三郎、市村竹之丞、都鳥さいけんのづ、江戸桜五人男かけあいせりふ」(抱谷文庫)、またセリフ正本「江戸桜五人男せりふ」(ケンブリッジ大学蔵、目録は享保十九年五月刊とするが誤りか)二種類が現存する。このような宣伝用の出版物が制作されたにも関わらず、この場面は人気を得ることができなかったようだ。

当時、中村座でも新しい演目を準備していたようだが、この興行以降番付などは残されていない。